

非生命力との闘い。地球という生命を潰そうとする、地球の異物であるその恐ろしい凶悪な存在は、自分たちの影響から生まれた蛇を道具に世を病ませ、それを人間へと移行させて、それしか知らない支配欲を形にする。

それに対し、調和と健康の世界しか知らない、自然界の生命(動植物)たち。どんなに病まされても、力無くさせられても(肉食動物へと変質させられても)、彼ら本来の本能は、それがそのままであってはならないことを知る。その(自然界)のために、遥か昔も、今も、ずっと変わらず地球感覚の時を生き続ける、数千の人間(生命)たち。太陽の希望に応えるために動き出した生命は、地球を元気にすることの他は何も知らない。(by 無有 9/05 2018)

## 再生(1)～(3)

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

## 再生(1)

1. 人間になり切れてない人間(動物)が僅かに居るだけのこの地で、人間経験を始めた、生命源からなる意思是、遙か遠い昔に地上に生を持った時と同じ、数千の数で、営みを行う。この地を選んだ理由は、それ以前の数千万年という間に歪な進化を遂げた人間のその脳の影響を、その地形により受けずに済むこと。そして、地球の自浄作用の果てに形づくられたその場所(島)が、地球生命の呼吸口のようにして在り、それを直に感じられること。それにより、変化・成長の基本形は生命本来のそれとなり、身体活動の次元を超えて、どこまでも地球感覚を普通とする生を安定させ得ることになる。

その機会を生み出したのは、ずっとそのままのくじら。彼の普通によって守られ続けた生命の力は、永い時を経て、人間再開の始まりを迎え、その全てを彼は支える。人間を選ばずして為し得ないこと、人間だからこそ可能とするこの意味の大きさをみんなで確認し、新たな時を創り出す。それは、数百万年も昔のこと。

2. 身体の次元を一旦離れる前の、それまでの時代に、なぜ肉食動物(恐竜)が誕生したかの理由となる事実を把握した彼ら生命は、その元の原因となる世界にきめ細かく入り込み、それを浄化するためには、再度同質の負(の原因の積み重ね)の経験を持つことが必要であると考え。地球が大きく揺れ動く間を経て、共に人間を再開した時、彼らは、何も無いこの地で、地球自然界の本来をそのまま

その意思是、蛇の脳と繋がり、その働きを支配する。そして、人間を傷つけ、彼らの経験の記憶の中にしつこく入り込む。

共に生きる動物たちが、無くてもいいはずの蛇への恐怖心を抱き始めたことで、人間は、事の重大さを理解しつつも、それまで以上に、原因の質を変化・成長させる。どんな状況でも、留まることは考えられない。

そんな中、蛇は、隙を見て人間を襲い、人間が取り込んではならない性質(次元)のものを、その傷口から体内に入れ込み、彼らの身体表現の在り様にじわじわと影響を及ぼす。永い間それが続けられる中、そうとも分からず慢性化させた感度のムラが、蛇への違和感を弱体化させ、その自覚も無く、それとの不必要な融合を重ねてしまう人間も出てくる。そんな風にして、蛇の脳を支配した存在は、人間の脳へと移行できるその下地づくりを着々と進める。

8. 他との融合や協調といった感性を全く持たない蛇の凶悪さは、それが理解できない人間にとって、どうにも対処し難く、知らずうちにその本来は崩されてしまう。その次元の動きがあることは、その手前で覚悟はしていたが、実際のその経験は凄まじい。余計な時間が取られ、その時間の原因が浄化されないまま続くその危うさの中に、更に時間を取られ、自由を失くす。蛇の本性が悪用されたことで、執拗に悪意(支配と破壊)を具現化させようとする別次の意思は、集中的に、数千の生命たちの動き封じを試みる。

その構図の中身は、地球自然界と融合する生命体と、そうではない異生体との主導権争い。それはまた、生命力対

られた腐敗型の生物が突如寄生し、次第に停滞と破壊の本性を強めつつ、それは形を変えていく。それが蛇である。

自然界全体の生命力が弄ばれ、苦しみ喘ぐ動物たちがそれでもけんめいに生きる中で、蛇は、得意気に誕生する。その脳は、始まりから狡猾と残忍さを備え、人間らしくない人間の、その卑劣で狡猾な感情の下地で居続ける。

人間の世界には本来否定感情は存在しないというのは、元々、その元となる蛇の本質が、地球自然界への抵抗であるということから。試みに、蛇絡みの全てから自由になってみる。否定感情と蛇の本質が困り出し、気づけば、太陽の光に照らされ、癒されて、姿を失くしていく。

7. 蛇の、他とは違うその異様な世界を知れば、この地(国)での樹木(松)との絡みの理由も、自ずと頷ける。一生命としての生のサイクルを崩されてしまうことで、病んだ姿をそのままに歪な変化を経験せざるを得なくなる、その切なく哀しい営み。根こそぎその原因から侵されたために、松は、無くてもいい現実を幾重にも重ね、蛇と密に関わることになる。松の不自然な姿は、自然界の植物たちの哀しみの象徴。松から蛇へと移行する破壊の意思は、この地で、改めて地球の意思の抑え込みにかかる。

獰猛さを潜める凶悪な感情で、他を怯ませ、事の主導権を握る蛇は、対象とする生き物を征服することにだけ神経を使い、そのための行動に徹する。相手がどんなであれ、彼らには他の選択は無く、その時に働かせる殺意も、獣のそれを超える。その異常さを普通とする蛇の世界は、自然界を操ろうとする非生命的な存在の意思の、格好の道具。

に、調和と健康の原因を限り無く高める。全てが優しさに包まれ、肉食動物も存在しないその柔らかな環境を淡々と繋ぎ、それを放って置くことはしない意思が動き出すその時を待つ。

太陽を知る数千の生命たちは、地球の望みに応えるべく人間の形を選び、地球自然界が経験しなくてもいいはずの哀しみと痛みの原因に対応する。数百、数千万年という地球時間に付き合い、人間経験を繰り返し活かして、確実にその原因を見出し、そしてそれを処理し得る手段を編み出す。太陽と共に、地球と一体となって、そのための生命としての人間時間を生きる。

3. 砂地が変わり出した時、植物たちが先にそれに反応し、少しずつ動物たちの動きは不自然になる。この時はまだ、体験をそのまま記憶するだけに留まり、なぜそうであるかの原因は、どこまでも意味不明のまま。ただしかし、それが始まったことを、彼らは知る。

決して本来を失わずに居ることで、次なる時への準備をする。違和感を細胞に記憶させつつ抵抗力を付け、自らの原因を力強くする。こんな風にしてかつて不穏な空気が蔓延したそのことの理解と感触を確かな体験的知識とし、その原因に入り込める機会を探る。それは、至極難しい実践となる。

時を経て、樹木の実に少しずつ変異が生じ出した時、その影響を受けやすい種の動物から、無いはずの緊張と不安を抱え込み、連鎖的にその負の原因は広がり出す。そこから逃れ得た動物は、本能にこの時の経験を染み込ませ

て、身を守る。そうではない動物は、徐々に本来を崩されていく。

人間を生きる生命たちは、この時、遙か昔のかつての経験の記憶の中に、同様の姿が在ることを知る。危険な物質と化したある大木の実を食べたことから、動物が凶暴さを備え、次第に肉食動物(恐竜)へと変わって行ったその姿を、数千万年(数億年)後のこの地で、実際に観察し得るに至る。経験の記憶のその原因を積み重ねるといふ、永い年月でのその感覚的理解は、彼らの知恵となり、その原因の力を成長させる。

4. 数億年前に存在した恐竜。彼らは、他の星ではないこの地球での生を経験した生命たち。私たちは今、彼らが生きた同じこの地球で、彼らと同じように地上(地面)で生きている。生命のルーツは、当然恐竜時代の生き物たちに辿り着き、更にその先へとそれは続いていく。彼らの異変は、この現代に、その負の原因を残す。

数千の生命たちは、時代環境に応じた生の形に適応させつつ、人間という姿のその原始の形を生き、数千万年前に、地上での経験を離れる。そして、海の仲間に生命の意思を預け、そのまま地球時間の流れに漂いながら、永い時を軽く突き抜けて、この地で生を始める。

遙か昔も、遠い昔も、生きる基本は同じ。数十万年前も、数万年前も、地球自然界が太陽(地球)の意思からズレてしまっているそのことをあらゆるところ(次元)から眺め、その原因へと入って行く。そこに在る、動植物たちの成長・進化の歪みと、彼らの本能の不自然さ。その原因を浄化し、

このまま地上の隅々にまで地球からの生命力を流されてしまつては、廻り回って肉食動物までが本来の生き方をしてしまうのでは…という、かの存在の、それまでに無い焦り。地上を腐敗へと導こうとするその姿無き不穏な意思は、そのために、変化とは無縁の蛇(の脳)を利用し、停滞そのものの空間を次々と生み出して、人間の生活環境までそこへと引き込んでいく。

現代の、蛇を特別に扱う姿勢は、自然界を尽く不自然にしようとするかつての非生命的な存在の、その凶悪な意思とその原因深くで繋がる。蛇絡みの信仰や神話の世界も、その形無き原因のルーツには、地上には無いはずの醜い腐敗型の経験が在る。

6. 動物たちみんなが、地球に住む一生命としての自らの分を生きていても、自分たちは、それを一切無視して、好き勝手に腐敗型の生を続ける、奇妙な蛇。その理由は、彼らの誕生の経緯が実に陰惨で、奇怪なものであることに尽きるが、それ以外にも、それらが備える、人間の否定感情の源のような醜い本性がある。

元々この地球には存在しなかった蛇は、数千の生命たちが再び人間を始める頃よりずっと昔(およそ2千万年程前)、ある樹木の土の中で、突然変異的にその生の元が始まる。

汚染されて傷つき、辛く苦しい時を生きる樹木は、根が力を無くして本来の仕事が出来なくなっても、それに抗えずに耐え続け、ただそのままにいるしかない中で生を繋ぐ。その根に、不穏な(自然界を病ませる)別次の意思に支え

持つ植物を生み出したその存在は、地球規模の変動をすり抜けて非生命的な原因を繋ぎ、放って置いても徐々に地球が終わりへと向かう道を安定させる。

ところが、数千の生命が再び人間を生き始めたことで、その腐敗・滅亡への道は、凶らずも不安定になる。かつての経験を活かして原因の力を強力に成長させる彼らの普通は、負の原因をどこまでも深く浄化し、固められた停滞の形さえもそのままには置かずに変化させる程の能力を備える。彼らによって地球と太陽が元気になることを恐れ、その存在は、直に操れる動物(蛇)を介して、人間たちのその生きる原因を押さえ込む。そして、蛇系の人間を増やし、彼らの行動の全てを封じる方法を実践する。

5. この地から湧き出るようにして、地球感覚の下地を持つ生命体の芯へと流れる、生命力。それは、本来をテーマに事を変え得る原因へと必要なだけ変換され、留まる結果とは無縁のところ、生命世界を支え続ける。島を囲む海繋がり仲間たちは、地球と一緒に、それを喜ぶ。

この地で人間を生きる生命たちの、その健全さを普通とする感覚は、生命力をいくらでも溢れさせて、地球の意思を通し、生き物たちみんなにその原因を流して、共に調和と健康の時を育む。ところが、蛇の脳が操られ、支配され出した時から、それは少しずつ負荷を覚え、自由な力を落とししていく。それでも、形を生み出す形無き原因を鍛え、変化させる人間たちは、全てを受容し、あるがままに変化に乗り、どんな経験も、可能な限り次への原因とする。

全てを本来へと戻すために、どんな負の原因をも上回る健全な原因で、歩みを止めずに、変化の質を成長させる。それは、現代でも同じ。そして、この現代だからこそより原因の質を高め得ることの重要さを、彼らは知る。

5. 居る場所から動くことのない樹木(松 etc.)から、動物(蛇)へと、その非生命的な意思が移行した時、地上は、どんより重苦しい空気で覆われ、自然界は落ち着かず、人間も、妙な負荷を覚えるようになる。動物たちは、それまで出会ったことのない酷く獰猛な感情を持つ蛇の出現に緊張し、要らぬ不安定感の中、生きる自由の質を低下させていく。生き物たちの環境は、次第に蛇の影響下のものとなる。

人間たちが備えるその健全・健康の原因を破壊するために、蛇の脳と一体化した姿無き存在の意思は、狂暴な性質を強めながら、人の住む世界に近寄り、彼らを傷つけ(襲い)、その細胞の質を取り込み、人間の健康的な普通を崩していく。しかしながら、その意思表示の具体化は、人間たちにとっては、より深くその原因へと入って行ける機会となるもの。それと繋がる元の次元の本質とその意図は、直接的な蛇のその動きにより、彼らの体感するところとなる。

砂地から樹木へ、樹木から蛇へのその意思の移行は、その全てが余りに不可思議な異次世界でのことであるゆえ、それは、後の世での、「動植物や人間の姿とはそういうもの…」という、作られた常識(嘘)の土台となる。それは、限り無く真の外れた生を、自然界の生命たち全てが経験しているということ。もちろん現代も、その上に在る。

6. 時代環境を不自然に変えられつつ永い時が過ぎ、人の住む世も、重く流れないものへとその質を慢性化させていく中、凶悪な意思を秘める蛇の動きは、より活動的になる。彼らは、人間たちが持つ力を完全に押さえ込むには、蛇のままではどうにもならないことを感じ取り、人間の脳と繋がり、自らが主導する人間となることを企てる。その時、転生を連ねながらも、生命本来を馴染ませ、共に生きる人間として数千の生命たちとは別に（別路線で）彼らの仲間となった人たちが、その隙を突かれ、そのために利用される。人は皆、それに巻き込まれ、密に関わりを持たされて、辛く苦しい時を生きる。蛇から人間への移り身を成し遂げようとする姿は、実に凄まじい。

数千の生命たちは、蛇の動きが異常な様を見せ出した辺りから、脳の不自由さを覚えながらも、未来へとその痕跡を残し、改めてその原因への対処がそこで為されるであろう期待を込めて、他の仲間たちと、蛇へと繋がる土器（縄文土器）を作り続ける。人間の姿への移行を試みる蛇の、その完璧なものには成り得ない不完全な姿（奇形の幼児、母体の異常）も土偶として残し、そこに在る、異常な世界と繋がる負の要素を、未来に届ける。地球本来をテーマにそれが活用され得る原因もそれに乗せ、仲間と共に再びその世界に触れることを、彼らは約束する。

7. 蛇の脳を経て、人間の脳の持ち主となった、非生命的な意思は、腐敗と停滞を基本とする本性のままに人間を生き、数を増やすことで力を強めるといふ、それまでの人の世に

て行われる海の仲間との融合を通して、なぜそれを成し得るかも分からない原因で、そのことをそのままにはさせない働きかけをする。形として固定されなければ、その手前の段において必要とすべく原因の調整が為される、無意識の意思の世界。数千の生命たちは、何もせずに事を動かす原因の力を成長させながら、生き物たちの自然な営みを、その中心に居て回転させる（変化に乗せる）。

そう簡単には病まされない原因をくじらと共に高めつつ、普通の質を変えていく人間。無生命化を企てる姿無き意思は、そこに在る海からの力に直接的に関わることを避け、部分的に細かく動くことを選ぶ。その存在は、ある場所の、ほんの少しの範囲だけを対象として、その砂地を徹底的に病ませ、そこに在る樹木を非生命的な原因のそれにすることを試みる。

それにも海の仲間は反応するが、（人間を通して）効果的に対処し得る機会をつくり出せず、そこは不穏な空気を帯びることになる。次第に樹木（松 etc.）は不自然な姿を見せ、動きの無い負の原因がいくつもの形を持つことになる。

4. 地球の生命力を粉々に破壊して、他の天体と同じようにそれを完全無生命化させようとする意思は、地球の予想を大きく超えた自浄力と、太陽のしぶとい援護によってそれが思うようには成し得ないことを知り、地球に住む生き物を変質させて、そこから確実に腐敗へと向かわせようとする。数千の生命たちの、その感知しにくい原因の力にジャマされながらも、肉食動物を増やし、獰猛な生き物や毒を

2. 数千の生命たちが新たに人間を生き始めたこの島(列島)は、地球がそのために用意してくれたかのように、遙か昔の地球自然界そのままの原因を備える程の生命力を溢れさせる。地球の息吹そのもののようなそれは、多くの火山帯を含み、海に抱かれる。その成り立ちを、海の仲間たちは喜び、自由に訪れ、陸の上で生きる生命たちを応援する。自然が自然に変化していくそこでの姿は、地球の意思をも通す。地球自然界の希望がそこには在る。

海の仲間のくじらは、そこで(陸上で)生じるそれまでには無い異変の類は、それがほんの僅かでも瞬時に感知し、その質を修正し得る原因を、人間の感覚に重ね合わせるようにして供給し、彼らを後方で支援する。人間たちも、自らの生命の意思表示にそのことを活かし、海の仲間の普通に支えられながら、自分たちの普通の質を成長させる。くじらにとってのそれは、何でもないあたり前の分(役)。感覚的交流を可能とする存在には、元気一杯に協力し、それを喜ぶ。

この国がくじらに冷たいのは、かつて彼らが純粋な人間たちの生を支えていたそのことに強い嫌悪を抱いた存在たち(の意思)が、人々の意識深くで未だ影響力を持ち得ているから。くじらは、古くから天敵(不吉な海獣)とされ、命を奪われ続ける。この現代、普通に人間であれば、その意識もなく海(地球)を守る彼らを捕獲するなど、決してあり得ない。

3. この国(島)が、なぜそうなのかも分からず微妙な異質感を覚える空気に包まれた時、人間は、転生の間を活かし

は無かった、質の伴わない(変化・成長とは無縁の)人間世界を作り上げていく。当然そこには、物事の原因に反応する感性や心というものは無く、それゆえ、狡さと残忍さをあたり前とする非人間的な感情と行為が繰り広げられることになる。

人間の歴史が支配と迫害(差別)を当然のこととして生み出されて来たのも、その原因には、土器や土偶関わりの出来事があり、本性が野蛮そのものの心を持たない人間が、その蛇絡みの生を元に、他を(心を持つ人を)隔てつつ増えたからである。

そのことを伝えるために、数万年も前から、生命たちは、土器作りを実践し、後の世で発見されても、それが壊されないよう実(蛇)を隠し、心ある人の感覚的理解と反応に、その原因のところから働きかける。その真剣さと、生命としてのさりげない覚悟が、ここに繋がる。

負の歴史のその始まりの原因が具体化した、蛇が異様に力を付けたかつての時代。そう簡単ではないその本質(正体)への対処を、生命たちは、この現代と協力して行う。この今、彼らはここに居て、ひとつひとつの形ある負の現実から、形無き不要なその原因を確実に浄化していく。

8. 永い年月を経て、この国の人口はかなりの数になる。そこには、作為的で非道な思惑も加わり、その数の力によって、心ある普通の人たちは、いつの時も生きにくさを経験する。

そうであってはならないと分かっている、どうにもならなかった時を経て、時代は、大きくその質を変え得る時を

迎える。その証が、無有日記の存在であり、そこで顕になる歴史の嘘(真の姿)と、地球自然界の負の原因の実際を通して、人は、そうであることを実感する。素朴で柔らかな人たちは、様々な反応を経て、数十、数百万年分深くから浄化され、本来を取り戻す。

数千の生命たちは、この時を以て、地球規模の仕事は一旦完了し、次なる動きは、時代に任せる。そして、軽やかに、滑らかに、地球らしい地球の原因の中で、生命としての人間を存分に楽しむ。共に生きる新しい仲間たちも、次々とそこに集い、時代の好転反応を余裕で眺めながら、新たな時を、地球と一緒に生きる。太陽も、地球の再スタートのこの時に、これまでにない光の力で、地球自然界の生命たちを応援する。みんなで、「再生」の時を分かち合う。(by 無有 8/18 2018)

## 再生(3)

1. 地球の健気な姿を応援する太陽と、そのことを観ていた、生命源からなる意思。太陽は、地球の不自然さを彼に伝え、彼は、地球に、形を持ち得る生命体を送り、それに応える。地球では、海の仲間がそれを見守り、生命たちの歩みを支える。

地上で始まった、彼ら生命たちの人間時間。その姿を自分のことのように感じていた海の仲間(くじら)は、それまでの地球の哀しみをよく知っていたので、いつも彼らに意識を向け、励まし、そうであることの全ての必要性の中に在る厳しさを、内なる世界から和らげる。彼らが身体を終える度に、太陽の光を存分に浴びれる安息の時をつくり出し、再び身体となるその時に、ぎりぎりまで一緒に付き添う。海の仲間は皆、生きる原因を大きなひとつに、地球のために生き始めた生命たちのために出来ることをする。

数限り無く時代を重ねつつ、人間の形を通して為し得る全てのことを生命たちがやり終えた時、くじらは、彼らの生命の核(全体の意思)を自分たちの次元に招き、地球時間を安心して漂える場所を差し出す。それまでの経験の記憶(の原因)をそのままに人間を離れた生命たちは、海の中で、地球そのものを生きる仲間(形無きひとつの意思)を預け、時の流れへの対応を任せる。500 万年程前の人間再開の時、そのために最適なこの場所を選んでくれたのは、くじら。海の仲間は、今も、あの頃のままである。



人間が、この地球に生きる一生命としての分を生きる時、それらのことは皆常識的事実となる。誰もが皆普通にそうであり、その普通を共とすることが、そのまま人生の喜びとなる。その普通しか知らない、この現代に生きる、数千の生命たち。彼らは、どの時代に生を持って、地球の望みに想い(原因)を重ねて、生命を生きる。地球に、人間として生きていけば、それは当然のこと。それ以外の生き方は出来ない。

彼らのこの地での経験の普通は、そうではない他地域の異常さを支えるその形無き存在たちの意思の反発を招く。しかし、それは分かっていたこと。砂地が変異を生じさせられようとしても、太陽の協力でどうにかそれを退け、それでもやむ無く進行してしまうその微妙な変化を体感の域に収めつつ、いつものように普通を生きる。その経験の記憶は、地球の財産となる貴い原因として、今もここに在る。

## 再生(2)

1. 形を生み出す形無き原因のところから、人としての責任を感じつつ、共に調和ある現実をつくり出すという、人間が人間でいるために普通に大切にされるべき、生きる基本の姿。その普通を基に、人間社会の中に在る様々な価値概念や思考(感情)に支えられた物や形を観察し、そこに在るそれぞれの性質を、分かりやすく無有日記は表現する。普通で、大切なことばかりが、そこには在る。

その無有日記が遠ざけられてしまっているという事実は、(人間らしさを遠くに)形ばかりの人間を生きる人たちの、その原因の無さという力によって社会が動かされていることを意味し、そうであることのその元となる動きの無い結果が無数に積み重ねられて来ていることを伝える。

その揺るぎない負の土台の中には、姿無き存在の意思からなる歪な(蛇の絡む)人間経験の記憶があり、現代の大勢は、その原因と強弱様々に融合する。それは、脳が純粹な人間のそれではないということ。人としての健全な原因が自然に育まれていないということ。無有日記への否定的な姿勢は、そのまま蛇色(非人間性)の濃さを顕にする。

2. 生育本来の原因を潰され、処理し切れない傷を負わされても、それでも地上で生きる一生命としての生を生き続けることしか出来なかった、松の木。自然界との自然な融合から切り離されたまま、悲しみの中で生を繋ぐ樹木は、

健康でいる普通という次元を遠くに、腐敗型の性質へとその姿を変えていく。

それを喜び、樹木にすり寄るある種の蛇は、そこでの生を愉しみ、負の融合を密に重ねて、その場所の停滞感を増幅させる。それまで経験し得なかった、植物への支配という満足感は、蛇の攻撃的な本性を一層強め、獰猛さを磨く材料となる。そこに、樹木の苦しみの元を生み出した意思是、異常過ぎる異常な働きかけをする。その気もなく、蛇は、その中身を変えていく。

蛇の脳に住み着くようにその原因の動きを支配した意思是、動物であるからこそ可能とする経験を活かし、その具現化された蛇特有の性向から取り込んだ(編み出した)残虐性を、そこに(脳の原因に)染み込ませていく。手足が無いことや体内の働きが独特であることも手伝い、地を這うだけで、その空間の動きが滞りを生む程の影響力を、蛇と一体となって作り出していく。

3. その多くは、目が異常に大きく、開くのもまれで、口には生まれながらに牙のようなものがある。手足は極端に太く、短いため、歩くことも出来ず、地を這うだけ。体には(薄黒い)うろこのようなものがあり、指や頭の形も人間のそれではなく、その殆どが数年以内に命を無くす。それらは、多種多様な奇形の姿を持つ、幼子たち。人間の脳を牛耳るために、その原因の次元に入り込もうとする、その姿無き意思の試みは、蛇の時のようには上手く行かず、何度もおかしな状態(身体)を経験する。

それが全てであり、そうではないことはどこにも無いから、ただ地球と共に、生命を生きる。

数千の生命たちが地上での経験を一旦離れた数千万年前、その時地球には、姿形は同じでも、肉食動物(恐竜)とその質を同じくさせたような野蛮な存在たちが居て、その後の数百、数千万年という厳しい時を生き存えた彼らの姿が、後の、猿人や原人(旧人)と言われる人間へと繋がる。そこには、非生命的な時代環境を基とする歪な生のルーツが在るために、やむを得ないことでもあるのだが、人類は、非地球感覚を磨き、地球自然界における生の在り様を無視して、不自然に成長・進化を遂げてきたということが分かる。植物食を普通とはしないその生は、植物によって成り立つ動物たちの世界を停滞させる。

肉食恐竜が出現する理由(原因)にこの地球が侵されてなければ存在することも無かった、進化という概念。地球(植物)に生かされ、地球(土)に還る生の基本形がそのままであれば、地上で生きる動物たちは(人間も含め)皆、変化し続ける平和と安心しか知らない。

8. 始まりが健全であれば、広がる風景も健全で、その原因が平和であれば、人は、そうではない世界を知らないで生きる。ここでは、あらゆるものが今とは異なり、思考は力を持ってない。争いや不公正はどこにも無く、他を隔てる感情も、不安感も、経験の外側。変化・成長する場所は、事の手前の(現実を生み出す)形無き原因だから、頭を忙しくさせる問題事も生まれえない。

続ける。ずっと連れ添っていた海の仲間が、そこへと案内する。

彼らの仕事は、地球が全く病んでいなかった太古の時代の頃からのありのままの変化・成長を、生き物たちと共に具現化すること。そして、それがそうではなくさせられてしまうであろう時を迎え、その全てを受け止め、地球の他の地域が何千万年(何億年)も前から病み続けてしまっているその原因を、処理・浄化すること。そして更に、その時を経て、争いや不調和を知らない地球本来の自然界へと、その原因を強めていくこと。どんなに時間がかかろうとも(時代が連ねられても)、それが始まったことを、地球は嬉しい。

動物らしくない動物(肉食動物)が出現する下地を一切持たないこの地で、人々は、それしか知らない平和と健康の原因を、そうである意識もなくあたり前に高め、拡大させていく。そして、何万年も、何十万年もその生を続ける中、次第にそれは、そうではない周りの地域から違和感として感得されるようになり、争いや不安定を当然とする世界(次元)の中心が動き出す。

7. 時代環境と地球の意思の浸透具合に合わせて、人間の前段階のような姿を持つ身体を自らとして、永くを生きた生命たち。脳が為し得ることの次元がかなり未熟であっても、全くそれは問題ではなく、いつの時も彼らは生命の意思に主導権を握らせ、研ぎ澄まされた感覚を重ね合わせながら、必要とすべきことを淡々とこなす。どこに、どんな風に居ても、互いの想いは呼応し合い、どんな時でも、不安は知らない。あらゆることが原始(未開)のそれであっても、そ

生まれてくる幼子の姿がどんなであれ、それらは皆、人間たちにとっての大切な命。彼らは、いつ終わるかも分からないその異変に深い悲しみを覚えながら、決して有ってはならないはずのその姿を形(土偶)として残し、未来に、その原因への浄化を託す。この地球での人間の歴史において、この時ほどの苦しみの原因は無い。それでも、生き続けるために、彼らは生きる。

蛇の脳を操りつつ凶悪な感情を次々と形にしていった存在の意思は、人間たちが奇形を前に苦しむその姿を笑い、思い通りにならない自分たちの様を悔しがる。そんな中、突然変異級の負の奇跡が形になる。時を経て、次第に蛇化する(蛇と同調させられる)人間の体内で、人間の形をした、本質が全く人間ではない体が育まれ、普通の幼子として誕生する。人間と人間とが獣のように争い(殺し)合うという、人の世ではあり得ないはずの悲劇は、この時の、蛇同然の感情しか持ち合わせない人間の出現による。

(当時の母体の辛さは、酷く厳しいものがあり、痛みを伴いながら目や口が変形したり、体の各所が委縮したり、肥大したりと、異常を極める。その姿も、(その原因を含ませた)土偶として、彼らは残す)

4. 地球は、自分の中で生きる生命たちが苦しむことは望まない。その事実がどこかに在るとすれば、それを放って置くことはせず、そのための原因を常に生み出し、太陽もそれに協力する。生命たちは、その地球の望みに生かされ、力強く柔軟に生きることで、その想いに応える。ムリなく自然に生きられる場所を選びつつ、生きる姿勢を健全に、命を

繋ぐ。自然界の変化に自らも参加し、不安も怖れも知らないありのままの受容と、生き続ける自由と責任を、無意識のところから育み、成長させる。

その全てを支える地球の意思を感じれば、凶暴さを備える動物は、元々どこにも居なかったことを知る。肉食動物もそう。それらの存在は、地球の悲しみであり、無くてもいい経験である。そうであることのその元の原因が、地球の処理能力(自浄力)の次元を超える程のものであるための、その世界。自然界に生きる生命たちは、その無くてもいいはずの負の連鎖に抗えないまま、生命本来が外された生を繋ぎ、生きることになる。結果凶暴さを備えて生きる動物たちも、そうではない自分の姿を失くし、それしかない生を生きる。

ひとつの生命体として、太陽の元で生きる地球。そこで生きる暴力的な動物の存在は、生かし生かされる生命本来から大きくかけ離れ、太陽との自然な関係性まで不安定にする。その果てに、やむ無くその修復(リセット)の時を創り出す、地球と太陽。それでも、それまでの負の原因は消滅せず、地球の悲しみは続く。

5. その原因を処理し、地球を地球本来へと変えるべく意思を形にする生命たちは、恐竜時代とされる太古の昔、そこに居て、なぜ肉食恐竜(動物)が出現したかのその原因となる事実を、永い時を連ねる中で把握する。その難しさに限界を感じながらも、自然界の切なる望みに支えられて時を活かし、直感を重ねて、その意思を貫く。

その始まりは、土質の変異、そして植物の変質。動物に食べてもらうことで自らの分を生きる植物と、植物を食べて(植物の栄養となる)土に還る動物との調和ある関係性は、土が本来の仕事が出来なくなることで、崩れ出す。毒性を持たされた木の実は、徐々にそれを食べる動物たちの脳をおかしくさせ、水も少しずつ不健全さを帯びて、生命のサイクルを乱す。そして、数万、数十(数百)万年と時が経つ中で、土に還らない肉食動物(恐竜)が出現し、地球自然界の生命たちの在り方は、大きくその質を低下させる。

その原因のところ、この地球には無いはずの不自然・不調和そのものの別次の意思が存在することを、時間をかけてどうにか見出した生命たち。しかし、それへの具体的な対処はどこにも無く、それが可能となる時の訪れを待つことにし、その時代時代での異変とその背景となる事実をしっかりと記憶に収めて、人間時間の次元を終わりにする。地球は、その時を待っていたかのように、より密度濃く変動を生じさせ、活動的になる。そして、次なる時の始まりの準備を、太陽と共に行う。

6. 数千万年という地球時間を経て、再び人間時間を始めた生命たち。そのための場所としてこの地を選んだことの重要さを、太陽は知り、地球もそうであることを願う。太陽が安心する、その地形と気候。地球が希望を託すことの出来る、以前からそこに居る素朴な生き物たち。それらの要素を基に、彼らは、生命としての普通の質を力強く安定させ、何も無くても全てが有る、調和と健康そのものの営みを